

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：13901  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2010 ～ 2012  
 課題番号：22520178  
 研究課題名（和文） 源氏絵の詞書筆者に基づく「源氏文化」の研究 研究課題名（英文）  
 Research on the Calligraphers of the Genji-Picture *Kotobagaki*  
 研究代表者  
 高橋 亨 (TAKAHASHI TORU)  
 名古屋大学文学研究科・名誉教授  
 研究者番号：10093048

研究成果の概要（和文）：近世前期の源氏絵の詞書筆者と、同時代の三十六歌仙などの詞書筆者たちとの重なりから、後水尾院を中心とした貴族文化圏が、その中心であることを解明した。徳川幕府による武家の政治権力も、王朝貴族文化の伝統を承けた、源氏物語や和歌とそれにまつわる書画の世界と相互補完的なのであった。そうした公家と武家との文化による結合が、嫁入り本などの女性文化の私的な享受へと通じ、やがては町人文化とされる元禄期以降の江戸文化の基底となったことを、国内外の多くの新資料に基づいて実証した。

研究成果の概要（英文）：Due to the overlap of calligraphers of early Edo period Genji-picture *kotobagaki* and collections of 36 Poetic Immortals, it is clear that the aristocratic cultural salon surrounding Retired Emperor Go-Mizunoo was at the center of their production. The political power of the samurai families that originated with the Tokugawa Bakufu, and the field of the *Tale of Genji*, *waka*, and the accompanying paintings and writings influenced by the traditions of aristocratic Heian dynasty culture were mutually complimentary. The blending of culture between those noble and samurai families became the basis of Edo culture itself, from illustrated books (*eiri bon*) that were enjoyed in private women's culture, to the merchant culture in end of the Genroku period. The proof of this is in the many newly discovered extant works both in Japan and internationally held.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：①源氏絵 ②詞書筆者 ③王朝文化

## 1. 研究開始当初の背景

- (1) 美術史や日本文学において、名品を除く江戸期の源氏絵などが研究の対象となったのは、比較的最近のことである。2007

年度から2009年度にかけて、基盤研究(C)「王朝物語の絵と和歌の関連についての研究」を行い、江戸前期の源氏絵など王朝物語の詞書を伴った画帖が、和歌

を中心にして享受されていることを確かめた。また、その過程において、大英博物館やフランクフルト工芸博物館など、欧米の機関が所蔵する源氏絵などについての情報を得た。

- (2) 日本国内の詞書を伴った源氏絵や三十六歌仙などの調査をし、情報収集するとともに、私費で購入した資料などの蓄積もあった。

## 2. 研究の目的

- (1) 近世前期に多く現存している詞書を伴った源氏絵について、その詞書筆者を中心にして、江戸期における源氏文化の特徴と、歴史文化的な背景を探求する。
- (2) 源氏絵の制作過程と『源氏物語』享受の実態について、個別の作例に則して検討するとともに、和歌や連歌、また俳諧などとも関わる、江戸前期の注釈を主とした源氏学や、梗概書などの和文古典学との関連を考察する。

## 3. 研究の方法

- (1) 基礎作業として、源氏絵とそれに伴った詞書、その筆者たちによる三十六歌仙など他作品も含めた画像資料などを収集し、データベース化した。
- (2) 公家を中心とした詞書の寄合書といった公的な作品から、武家や公家の婚姻にまつわる嫁入り本、また、女性の私的な享受のためといった製作事情の差異を視野に入れて、それらの作品の実態に即した考察を進めた。

## 4. 研究成果

- (1) ウィーン国立工芸美術館 (MAK) 本「源氏物語絵詞画帖」を発見したことをはじめ、米国メトロポリタン美術館・ニューヨーク公立図書館・インディアナ大学美術館と図書館など、海外の調査に基づいた画像の収集とデータベースの作成をした。それによって、これまでに先行研究をふまえて作成していた「源氏絵詞書伝称筆者一覧」を増補し充実させて、公家を中心とした源氏絵や三十六歌仙絵の成立の実態とその背景を考察することができた。
- (2) 17世紀前半の源氏物語画帖の詞書筆者としては、八条宮智仁 (1579-1629)、四辻季継 (1581-1639)、阿野実顕 (1581-1645)、青蓮院尊純 (1591-1653)、中院通村 (1587-1653)、西園寺実晴 (1600-1673) などが、諸作品の筆者として重出する、代表的な人物である。例えば中院通村は、室町期までの『源氏物語』注釈を集成して『岷江入楚』を編纂した中院通勝の子であり、後水尾天皇に近侍して和歌や源氏学の中心にあった。三条西実条とともに、武家伝奏として徳川幕府との関係を仲介

し、徳川家康に『源氏物語』を講義してもいる。これらの人々が源氏絵の詞書筆者たちの中心にいることは、徳川幕府をはじめとする武家の権威を、文化の側から支えていたことを意味する。徳川前期の武家と公家とは、相互補完的な関係にあった。

江戸前期の源氏画帖や源氏絵の貼交屏風においては、絵は土佐派・住吉派・狩野派・岩佐又兵衛派といった専門の絵師による。詞書を公家や皇族が寄合書するばあいは、その執筆時点における官位の高い順に、桐壺巻から夢浮橋巻までを機械的に割り振ることが通例であった。

- (3) 17世紀後半の源氏絵の主要な詞書筆者としては、二条康道 (1607-1666)、西園寺実晴 (1600-1673)、葉室頼業 (1615-1675)、飛鳥井雅章 (1611-1679)、大炊御門経孝 (1613-1682)、徳大寺実維 (1636-1682)、七条隆豊 (1640-1686)、千種有能 (1615-1687)、今出川公規 (1638-1697)、園基福 (1622-1699)、鷹司房輔 (1637-1700)、花山院定誠 (1640-1704)、葉室頼孝 (1644-1709) などがいる。

このうち、とくに飛鳥井雅章はこの時代を代表する能筆の文化人で、大英図書館蔵54名の詞書筆者による住吉如慶本、また50名の寄合書のうち36名がこれと重なる松井文庫『小倉山荘色紙和歌』の筆者目録の識語を記すなど、コーディネーター的な役割を果たしたとみられる。

また、大炊御門経孝は大英博物館蔵「源氏物語白描画帖」の単独詞書筆者と伝称され、東京国立博物館本『徒然草画帖』(1678)、同『新三十六歌仙画帖』(1664)の詞書筆者でもあるという。そして園基福は、サントリー美術館蔵の住吉如慶筆『源氏物語画帖』の伝称筆者であり、徳川美術館蔵土佐光則源氏画帖、大英図書館本、住吉具慶茶道文化研究所本、根津本などの源氏絵に加えて、広隆寺蔵の住吉如慶筆『聖徳太子絵伝』、板橋区立美術館蔵の住吉具慶筆『三十六歌仙画帖』、チェスタービーティ図書館蔵『源氏物語絵巻』の詞書筆者としても名をつらねている。

架蔵 Gen 庵の『哥僊』という土佐如聲画の三十六歌仙画帖にも、公家36人の寄合書のうちに、やはり飛鳥井雅章と園基福は名をつらねている。1660年代の後半に成立した作品である。

- (4) Gen 庵には17世紀とみられる三十六歌仙の色紙や貼交屏風、またそのマクリとみられる作品が、七種類あり、それぞれにその詞書や絵の表現に知的遊戯の豊かさが示されている。

A「三十六歌仙画帖」は、丸い色紙に、岩佐又兵衛派風の素朴な歌仙絵を描き、詞書は、

裏辻季福(1605-1644)が人丸はじめ16枚、冷泉為清(1631-1668)が貫之ほか9枚、阿野公業(1599-1683)が躬恒ほか6枚、小川坊城俊完(1609-1662)が家持ほか3枚、広橋・光(1616-1654)が猿丸ほか2枚である。それぞれ、丸い色紙における歌仙絵の余白という制限を生かしつつ、その散らし書きに洗練された遊びがみられる。中でも、小川坊城俊完は曲筆による鏡文字で書いている。

B「三十六歌仙団扇型色紙屏風」は、六曲一隻の小屏風に、唐様の団扇型色紙に絵と詞とをそれぞれ「左」「右」の三人と三首ずつ、別に描いて貼ってある。軽妙洒脱な書は一筆かと思われるが、筆者不明である。

C「三十六歌仙色紙」は「土佐絵」と記された台紙貼りの大ぶりの長方形の色紙。濃彩のやまと絵で土佐派の絵師によるか。作者名の上の「左」「右」は、書いたり書かなかつたりで、一筆とみられるが筆者不明。

D「三十六歌仙図色紙」は清原雪信画(1643-1682?)。詞書はうち二枚に「七十五翁隆正書之」とするが、筆者は不明。紙本の同じ角色紙に絵と詞を記した晩年の名品。

E「哥僊」土佐将監如聲画、絹本に絵と詞書36枚を記した折り本画帖。詞書筆者は近衛基熙(1648-1722)以下、飛鳥井雅章や園基福を含む36名。1660年代後半の成立。

F「三十六歌仙画切絵色紙手鑑」紙折本画帖で、草花切り絵の色紙に歌仙絵のみを記し、歌などの詞書は記さない。切り絵の植物から歌を推測できるものと、必ずしもそうでないものがある。絵師の落款や伝称はない。

G「三十六歌仙貼交大屏風」六曲一雙の本屏風に、絹本の色紙の絵、紙本の色紙の歌詞書を貼交る。絵と詞書は本来別だったかもれない。

これらの歌仙絵の絵様を、慶長期に成立した「光悦書整版本(嵯峨本)」と比較すると、この嵯峨本の絵がA~Gの原型だといえる。

(5) 17世紀の三十六歌仙などの絵と書にみられる、高度に知的な遊戯の精神と繊細な美の感覚は、源氏絵とその詞書とも共通している。Gen庵には室町期の「十二類合戦絵」の異本に基づいたやはり17世紀中葉の狩野氏信画「十二類歌合絵」もある。この詞書筆者も不明だが、近衛三藐院流の能筆である。その絵と詞書のもどき(パロディ)の手法は、こうした時代の趣向の典型といえる。

また、F「三十六歌仙画切絵色紙手鑑」と同じく切り絵色紙で、さらに多様な形態の60枚の色紙に、「園中納言基勝卿」「葉室中納言頼重卿」などの極札をもつ「草花切絵色紙貼交屏風」もGen庵にある。これと同様の「十二月花鳥和歌」画帖がフランス国立図書館東洋写本室にもある。こうした、高度に洗練された切り絵の絵と書による美的享受は、現存

作品によれば、元禄期の前後に限られる。

(6) この時期を代表する王朝古典文学者の北村季吟(1624-1705)は、室町期までの和文学を集成し、本居宣長らの国学以前に、近代国文学の基礎を確立したといえる。この季吟は、はじめ貞室に就くが、松永貞徳に師事して貞門俳諧の中心で活躍した実作者でもあった。後年に和歌や歌学を、飛鳥井雅章や清水谷実業に学んでもいる。

季吟はまた松尾芭蕉の師でもあり、17世紀の和文古典学は、俳諧や和歌の実作活動とも結合して、美的な書画の表現を大衆化させて、元禄期以降の江戸町人文化を形成したのであった。

江戸前期の源氏絵や三十六歌仙の画帖また手鑑の類には、近衛前久や鳥丸光広などの名もしばしばみられる。こうした、公家による王朝文化の伝承が、徳川幕府をはじめとする武家、そして町人文化へと展開したことが実証できたのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- ① 高橋 亨 十二類歌合絵と詞書の〈もどき〉表現 『文化創造の図像学』アジア遊学154、査読無、2012、166-179
- ② 高橋 亨 清原雪信と王朝女性文芸の伝統 むらさき49、査読無依頼原稿、2012、45-48

[学会発表](計3件)

- ① 高橋 亨 物語と歌の絵 絵入本国際研究集会、2012年11月23日、名古屋大学
- ② 高橋 亨 近世初期の詞書を伴う源氏絵について E A J S (ヨーロッパ日本学会) タリン大会、2011年8月22日、タリン大学(エストニア)
- ③ 高橋 亨 源氏絵の詞書と歌—ウイーン MAK 画帖を中心に 古代文学研究会、2010年11月14日、名古屋大学

[図書](計3件)

- ① 高橋 亨 『源氏物語』の後宮と密通『王朝人の生活史』、77-94、森社、2013
- ② 高橋 亨 『源氏物語』をめぐる語り手と作者の系譜 『物語の言語—時代を超えて』149-170、青簡社、2013
- ③ 高橋 亨 清原雪信の「源氏物語画帖

とその画風』『武家の文物と源氏物語  
絵』、408—430、翰林書房、2012

- ④ 高橋 亨 プラハ本「狭衣物語絵」の  
物語場面 『狭衣物語 空間／移動』、  
27—47、翰林書房、2011

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 亨 (TAKAHASHI TORU)  
名古屋大学・文学研究科・名誉教授  
研究者番号：10093048

### (2) 研究分担者なし

### (3) 連携研究者なし